国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和3年5月1日発行　第45巻第5号通巻第524号

月刊みんぱく

2021 5月号

特集

島世界の弔い

島世界における葬送の人類史　小野林太郎／琉球列島の葬送と墓　前田一舟
沖縄における崖葬墓文化の伝統　片桐千亜紀／トラジャの葬墓文化　山下晋司
ベトナムの甕棺埋葬　鈴木朋美

十六日祭のご馳走

池上 永一

コロナの緊急事態宣言に見舞われ、この一年間、ずっと自炊をしていた。

この原稿を書いている二月は、故郷の八重山諸島で「十六日祭」という先祖供養が行われる。旧暦の一月十六日に執り行われる行事で、島人は家族総出で墓に参り、お重を広げて一族門中で宴会をするのだ。

八重山諸島では沖縄本島で行われる旧暦三月の清明祭ではなく、この十六日祭を先祖供養の日とする。違いは先祖霊の新旧であるといわれている。新しい先祖霊を供養するのが十六日祭で、旧い先祖霊を供養するのが清明祭だというが、実際は、新旧の区別をつけているわけではない。

沖縄の墓は亀甲墓と呼ばれる中庭を擁した造りで、一度に五家族二十人ほどで会食できる広さだ。各家庭が拵えたお重の中でも、富田のオバァが作るラフテー（豚の角煮）が好評だった。オバァは若い頃に料亭の厨房で働いていたことがあり、その経験からオバァの作るラフテーは格別だった。

今日はオバァから教わった通りのラフテーを作ってみよう。

まず豚のバラ肉（皮つき）ブロックを用意する。

ラフテーは下茹でが最も重要だ。沸騰した鍋にバラ肉を入れ、豚の臭みと脂を徹底的に落としていく。普通は長ネギと生姜で臭いを取るが、オバァはジャスミン茶を使った。ティーバッグにジャスミン茶を入れ、二時間コトコト弱火で下茹でしていく。

下茹でが終わったら、バラ肉を六等分に切る。この時、ジャスミン茶の爽やかな香りが豚肉から漂い、いかにも高級そうな味を予感させる。次に切ったバラ肉にフライパンで焼き目をつける。こうすると型崩れしなくなるし、見栄えがよくなる。

味付けはジャスミン茶の香りを殺さないよう、醤油、黒砂糖を控え目に、そして泡盛を大量に使う。肉を柔らかくするのは、この泡盛にかかっていると言っていい。

とろ火で一時間煮込み、火を消して一時間冷ます。冷ましたら、また一時間とろ火で煮込み、一時間冷ますを三回繰り返す。既に作り始めてから八時間が過ぎている。

出来あがったラフテーはお箸で持つと、皮のゼラチンが自重で垂れ下がり、お餅のような柔らかさである。口に含んだ瞬間、ジャスミンの香りが広がりお花を食べているような気持ちがする。余分な脂身もなく、実にすっきりとした味わいである。

食べながら、ふと富田のオバァが亡くなって十三年が経つことに気づいた。オバァのラフテー美味しかったよ。これをお供えするね……。

プロフィール
1970年沖縄県生まれ。94年早稲田大学在学中に『バガージマヌバナス』（新潮社）で第6回日本ファンタジーノベル大賞を受賞し、デビュー。97年刊の『風車祭』（文藝春秋）が直木賞候補に。2005年刊の『シャングリ・ラ』（角川書店）はテレビアニメ化、2008年刊の『テンペスト』（角川書店）はベストセラーとなり、舞台化、NHKでテレビドラマ化、映画にもなった。17年『ピストリア』（KADOKAWA）で第8回山田風太郎賞を受賞。最新作は『海神の島』（中央公論新社）。

月刊 みんぱく

5月号目次

1 エッセイ　千字文
十六日祭のご馳走
池上 永一

特集　島世界の弔い

2 島世界における葬送の人類史
小野 林太郎

4 琉球列島の葬送と墓
前田 一舟

5 沖縄における崖葬墓文化の伝統
片桐 千亜紀

7 トラジャの葬墓文化
山下 晋司

8 ベトナムの甕棺埋葬
鈴木 朋美

10 ○○してみました世界のフィールド
居庸関碑文を現地に訪ねる
韓 敏

12 みんぱく Information

14 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
ガーナの輸出向け籠づくり
牛久 晴香

16 みんぱく回遊
新・音楽展示の歩き方
岡田 恵美

18 シネ倶楽部 M
感覚に訴える映画「戦ふ兵隊」の方法
――「戦ふ兵隊」
北村 皆雄

20 ことばの迷い道
教団の名は誰のもの?
石原 和

21 次号予告・編集後記

特集

島世界の弔い

島世界における葬送の人類史

人の死に直面したとき、わたしたちはその死を悼み、葬儀をおこなう。葬儀の方法は地域によって多様であるが、人類史の時間軸でとらえなおすと、また違った展開を見ることができる。本特集では、アジアの島嶼部に注目し、琉球列島やインドネシアなどにおける弔いのあり方について、その過去と現在の姿を最新の人類学・考古学研究から紹介する。

小野林太郎　民博 学術資源研究開発センター

死者の弔いは、わたしたち人類の暮らしに欠かせない行為である。葬式や墓は、世界各地で目にする光景だ。では人類は、一体いつごろから死者を弔う行為を発展させてきたのだろうか。そんな問題意識から、わたしたちは二〇一九年度より「島世界における葬送の人類学」という共同研究を始めた。近年の人類学・考古学研究に基づくなら、弔いの文化が発展したのはわたしたち現生人類（ホモ・サピエンス、以降ではサピエンス）やその兄弟分ともいわれるネアンデルタール人の出現以降のようだ。サピエンスによる最古の例では、イスラエルのカルメル山南麓にあるカフゼー洞窟やスフール洞窟で発見された約一〇～九万年前の埋葬遺跡が有名である。またその近くにあるタブーン洞窟からは、一二万年前ごろに遡る可能性のあるネアンデルタール人の埋葬人骨が発見された。

インドネシア、スラウェシ島中部の石灰岩洞窟で発見された、風葬後、木棺に複葬された人骨群（2016年）

島世界へ移住したサピエンス

アフリカ大陸で誕生したとされるサピエンスは、出アフリカを果たした後、五万年前ごろまでには海を渡り、東南アジアの島世界やオセアニアのサフル大陸（現在のオーストラリア、ニューギニアなど）への移住に成功した。そしてその後、遅くとも四万年前ごろまでには日本列島にも到達した。残念ながら、火山による酸性土壌で覆われている日本列島では、旧石器時代に遡る人骨はほぼ残されていない。ただサンゴ島の多い琉球列島のみは例外で、アルカリ性の強い石灰岩洞窟からは多くの古人骨が見つかっている。これは東南アジアの島世界でも同様である。こうして島世界へと移住したサピエンスだが、どのような弔い（葬送）を営んできたのだろうか。

島世界の弔いは「複葬」にあり

ところで、なぜ島世界の弔いなのか。島という環境の最大の特徴は、四方を海で囲まれていることにある。それゆえに島世界では、島単位で共通性の高い文化や伝統が形成され、それらが比較的長期にわたり大きく変わらずに残りやすい傾向がある。特に離島ほどその傾向が強い。例えば日本の琉球列島では、時間をかけて遺体を白骨化したうえで墓に合葬する風葬が近年にいたるまでおこなわれてきたが、これらは琉球独自の葬送というイメージが強い。しかし、人類史を紐解けば、風葬は世界各地で確認されてきた葬送の形のひとつだ。

死者をそのままの状態で弔う葬送は「一次葬」といい、体全体を伸ばして埋葬する伸展葬や手足を折り曲げて埋葬する屈葬が一般的である。先述した最古の事例も、こうした一次葬の可能性が高い。これに対し、風葬などで白骨化した遺体を改めて集めて別の墓域や蔵骨器（骨壺）などに葬る行為は「複葬」とよばれる。遺体を火葬し、骨壺に納め、墓に葬るという現代日本の葬送も「複葬」といえよう。

興味深いことに東南アジアの島嶼部でも、先史時代から西欧の影響を受ける植民地時代までは、風葬を含めた複葬が一般的だった。今でも東インドネシアの島々では、石灰岩の崖や洞窟内に複葬された人骨が残されていたりする。スラウェシ島のトラジャの民族誌事例からは、こうした遺体が風葬や壮大な儀礼をおこなった後、洞窟や岩陰に人工的に掘られた横穴に副葬品や木棺とともに葬られたものであることがよくわかる。

石灰岩洞窟を利用した北トラジャ県ロンダの崖葬墓。入口付近に古い船形木棺が置かれている（撮影：山下晋司、インドネシア、スラウェシ島、1984年）

同じような光景は、琉球列島の石灰岩洞窟や岩陰でも目にすることができる。このように洞窟や崖下などを墓域とする葬墓は崖葬墓とよばれる。琉球やインドネシアの島世界では、この崖葬墓に代表される複葬がひとつの弔いの形だったといえそうだ。

風葬後に遺骨を甕などの蔵骨器に納めた、徳之島の伊仙町における崖葬墓の事例（提供：伊仙町教育委員会）

島世界における複葬の多様性

弥生時代のころ、日本列島では西日本から九州にかけて甕棺葬という弔いの方法が流行した。大型の甕棺を使い、遺体をそのまま納め葬る場合もあったが、甕棺に骨のみを納めて埋葬するのが一般的だったようだ。つまりこれも複葬である。そのほぼ同時期、フィリピン諸島や東インドネシアの島々でもこの甕棺葬が一部で流行した。さらに大規模な甕棺葬が出現したのが、フィリピン諸島と南シナ海を挟んで対峙するベトナム沿岸部である。ベトナムは大陸部に位置するが、その沿岸部はフィリピン諸島との関係を無視できないことから、ここでは島世界の一部として注目したい。弥生時代は、大陸の金属器文化や稲作文化が日本列島に入ってきた時代である。ほぼときを同じくして東南アジアの島世界にも大陸部より金属器やガラス製品といったあらたな物質文化が流入した。甕棺葬の流行はそんな時代の変化とも関係していたのかもしれない。

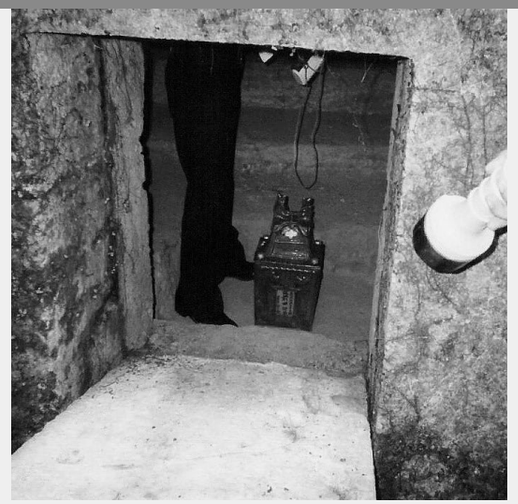
崖葬墓文化や、現代にまで続く骨壺の文化にもつながる甕棺葬は、島世界における弔いのあり方を我々に物語っている。

右：ベトナム、ホアジェム遺跡で出土した甕棺。ひとつの甕棺内に成人女性1体と幼児2体の骨が納められていた（所蔵：カインホア省博物館、撮影：山形眞理子、2010年）
左：ベトナム、ビンイェン遺跡の甕棺に納められていた副葬品。上はネフライト（軟玉）製の耳飾り、下はガラスビーズ製のネックレス（所蔵：クアンナム省博物館、撮影：山形眞理子、1998年）

琉球列島の葬送と墓

前田一舟　うるま市立海の文化資料館学芸員

この一年、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、親しい人の突然の死に直面しても、その遺体に触れることもできないまま、埋葬や火葬を経て墓地で別れをつげた方もいたことだろう。類人猿からわかれた人類は他人を思いやる心を手にし、人を慈しみ、その死を哀悼する気持ちを育んできたが、コロナ禍は弔いがかけがえのない行為であることをあらためて思い起こさせた。



シルヒラシドゥクルに安置された厨子甕（1996年）

遺骨を重視する文化

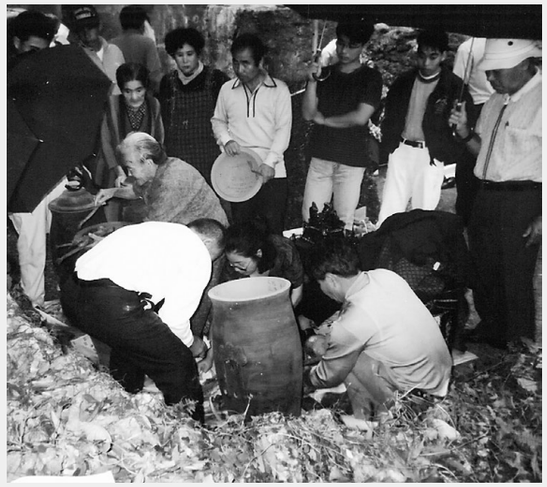
二〇一九年に公開された照屋年之監督の映画「洗骨」は、全国各地に不思議な感動を与えたと思う。この作品では、沖縄の一部で現在まで続く洗骨の習俗が描かれている。

本州と琉球列島の葬送には大きな違いがあり、それは告別式の場面であらわれる。本州ではおもに遺体を重視して儀礼が進められるが、沖縄県や鹿児島県の奄美群島では遺骨が重視される。基本的に沖縄の告別式では遺体ではなく、火葬を終えた遺骨を祭壇に安置するのだ。この一連の行為の文化的背景には、かつて火葬が普及する前に主流であった遺体を風葬するという行為と、白骨化した骨を弔うというふたつの行為があり、それは琉球列島の墓の構造からもうかがうことができる。もともと琉球列島各地では、崖下や洞穴、岩陰などに遺体を安置し、風葬していた。このような墓は沖縄の考古学では風葬墓とよばれている。

「琉球式墳墓」の成立

現在、沖縄において死者を葬るときは、遺骨が入った厨子甕とよばれる蔵骨器（骨壺）を墓のシルヒラシドゥクル（「遺体の汁を減らす」の意）という場所に安置する。一九六〇年代に火葬が普及する前の沖縄では、この場所で遺体を風葬によって骨にしていたことがわかる名称だ。当時、遺体は約三年ないし七年の期間を経て改めて墓庭に出され、遺骨は洗い清めて厨子甕に納められた。そして、厨子甕は墓のタナ（段）という場所に安置されたのだった。現在ではあらたに死者が出た場合、シルヒラシドゥクルにあった厨子甕がタナへ移され、新しい死者の厨子甕がシルヒラシドゥクルに置かれる。

このような弔い方と墓の構造は、琉球において首里、那覇の地域で破風墓や亀甲墓などとして一七世紀に成立し、浦添から沖縄本島の中部、北部へ順次拡大していった。沖縄研究の開拓者で民俗や歴史、言語、文学などに詳しい伊波普猷（一八七六～一九四七年）は、遺体を風葬し、そして洗骨して納骨するこのような形式の墓を「琉球式墳墓」と名づけた。この一連の習俗に関する記述は、一七三六年の『四本堂家礼』などにもある。亀甲墓の外形は中国福建省あたりの墓との類似がはやくから指摘されている。沖縄の亀甲墓などは長い歳月をかけて各時代の弔いの方法などの影響を受け、独自の産物となったわけだ。破風墓や亀甲墓は、現在でもよく見られる墓の形態である。



洗骨し、複葬するようす（1994年）

「琉球式墳墓」以前の葬送儀礼

「琉球式墳墓」が確立したのは一七世紀だが、風葬と洗骨の習俗が始まったのはいつからなのだろうか。洗骨については『四本堂家礼』などの史料から一八世紀にはおこなわれていたことがわかっているが、風葬は崖下や洞穴などから発見される考古学の事例から、縄文時代、あるいは更新世期にまで遡る可能性が指摘されている。

しかし、その後、一一世紀までは遺体を埋葬する事例が多く見られ、突如、一四世紀より風葬という弔いの行為が藪や洞穴などで活発に始められる。風葬が琉球で再び活発化した背景には、当時の王族や民衆の宗教観、死生観の変化が指摘できよう。しかし、不明な点もまだ多く、その解明が今後の研究課題である。

上：那覇市の伊江御殿（イエウドゥン）の墓。1685年ごろに造営され、沖縄県内でもっとも古い亀甲墓とされている（2013年）
下：屋慶名（やけな）集落に残っている14世紀ごろの「イタバカ」。陶器の骨壺がなかった時代、このあたりではこのような木製・家型の大型厨子に家族単位で納骨していた（2010年）

沖縄における崖葬墓文化の伝統

片桐千亜紀　沖縄県立埋蔵文化財センター主任専門員

沖縄で洞穴や岩陰を探検すると、多量の人骨がゴロゴロと散乱している衝撃的な光景を目の当たりにすることがしばしばある。人骨は壁際に集められているものもあれば、陶器や珊瑚から作られた蔵骨器（骨壺）に納められているものもある。朽ち果てた大きな木板が散乱していることもあり、かつては木棺が置かれていたことを想像させる。これが崖葬墓である。

崖葬墓の発掘

崖葬墓は琉球王国時代から近年まで盛んに営まれていた文化で、沖縄では「風葬墓」とよばれている。洞穴や岩陰を墓地とし、遺体は墓内で風葬され、白骨化した後には壁際に集骨・安置されたり、一体から複数体分が蔵骨器に再葬されたりする。発掘調査を実施すると、バラバラの人骨が次々と発見される。そのなかには人骨がかろうじてヒトの形をとどめているものもある。足の骨の一部や椎骨（背骨）が並んでいたりするだけだが、これは遺跡からのとても重要なメッセージで、遺体がまさにこの場所で風葬されたことを物語っている。沖縄の崖葬墓では、風葬から再葬まで、死者を何度も手厚く葬るという複葬がおこなわれてきた証拠だ。

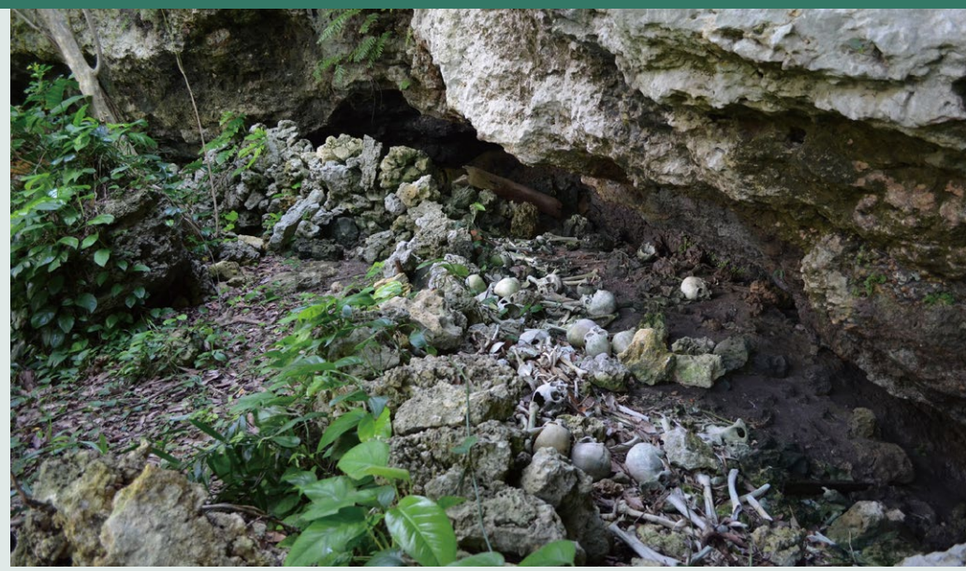
旧石器時代に遡る!?

じつは、このような崖葬墓は琉球王国時代からグスク時代（中世）を経て先史時代にまで遡ることがわかってきた。

わたしが発掘調査に参加した石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡では、約二万七〇〇〇年前の旧石器時代にまで遡る人骨群が多量に発見された。その個体数は二九体以上と推定され、ほとんどはバラバラの状態で壁際に集められていたが、出土状況を

注意深く観察すると、ヒトの形をとどめているものもあった。この洞穴が崖葬墓として利用され、風葬がおこなわれていたことの証拠である。

さらに興味深いことに、この墓地では乳幼児の遺体は確認されていない。すべて成人から若年によって構成されていたことから、乳幼児は別の場所に葬っていた可能性が高い。縄文時代以後の崖葬墓でも成人のみが葬られている事例が確認されているし、現在は失われたが、沖縄には「ワラビンチャー墓（子どもの墓）」とよばれる子どものみを葬った墓もあった。成人と子どもを区別して葬る習俗が先史時代から琉球王国時代にまで存在したようだ。

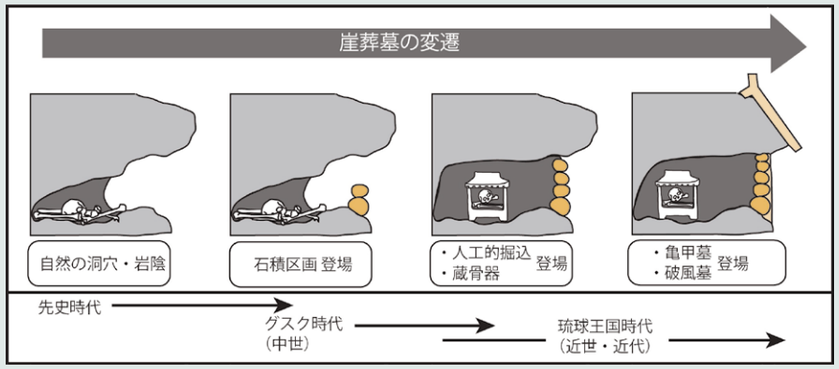


宮古島の岩陰に作られた琉球王国時代の風葬墓。細長く続く岩陰を墓としたからか、地元でこの墓は「長墓（ながばか）」とよばれている（2015年）

伝統的な島文化

沖縄の崖葬墓文化は、先史時代から現代にまで続く伝統的な文化だといえそうだ。もちろん、先史時代やグスク時代には崖葬墓だけでなく、遺体を土中に埋めたり、火葬をするなど、多様な弔いの形が存在した。しかし、それにもかかわらず、琉球王国時代に崖葬墓が主流となるに至ったことは注目に値する。先史時代から時代を経るにつれ、洞穴や岩陰の入口に石を積んで外の世界と明確に区別したり、洗骨した遺骨を蔵骨器に納めたり、家の破風や亀の甲羅のような構造物を墓の外側に取り付けたりするようになった（破風墓、亀甲墓）。変遷の過程で風葬墓には定型化したものも生まれ、その形式はのちに「琉球式墳墓」と名づけられた。

先史時代から連綿と続く崖葬墓文化から、島に適応した人類の葬送のあり方が見えてくる。



右上：風葬され壁際に集められた人骨群（縄文時代、伊是名村具志川島の岩立遺跡西区）
（提供：沖縄県立埋蔵文化財センター、2006年）
左上：両膝を抱え込む姿勢で風葬された人骨（旧石器時代、白保竿根田原洞穴遺跡）
（提供：沖縄県立埋蔵文化財センター、2010年）

トラジャの葬墓文化

山下晋司（やましたしんじ）　東京大学名誉教授

トラジャの葬送儀礼

今から半世紀近く前、一九七六年から一九七八年にかけて、インドネシア、スラウェシ島のトラジャでフィールドワークをおこなった。この調査に基づいて、わたしは『死の人類学』（内堀基光と共著、弘文堂、一九八六年）や『儀礼の政治学――インドネシア・トラジャの動態的民族誌』（弘文堂、一九八八年）などの民族誌を著した。

タナ・トラジャ県レモの壁龕墓。副葬用人形の何体かが盗まれている（1984年）

民族誌の中心的課題は、トラジャの伝統的宗教（アルック・ト・ドロ）に基づく儀礼の記述と分析だった。当時、アルック・ト・ドロの信奉者は住民の約三〇パーセントを占めていたが、今日ではその信奉者は三パーセントを切り、住民のほとんどはキリスト教徒である。行政的にも二〇〇八年にはタナ・トラジャ県から北トラジャ県が分離し、地域行政の単位も変わった。その意味では、わたしの民族誌は今や「歴史資料」となったのかもしれない。

石灰岩質の岩壁を鑿（のみ）で穿（うが）って、壁龕墓を掘る。入口は約1メートルの方形で、奥行きは2〜3メートル、高さは1.5メートルぐらい（1977年）

もっとも、トラジャのキリスト教徒は伝統的宗教のやり方を「慣習」（アダット）として受け入れたので、水牛供犠を伴う「伝統的な」葬送儀礼はキリスト教徒のあいだでも今日にいたるまでおこなわれている。スハルト政権崩壊後の地方分権化のなかで、伝統文化の復興も進んでいる。

崖葬墓

トラジャの墓は崖葬墓（リアン）とよばれるものである。これには、①自然洞窟を利用したもの（三頁参照）、②岩壁に横穴を掘って作ったもの（壁龕墓）がある。壁龕墓は地上十数メートルの高所に掘られることが多い。遺体だけでなく副葬品なども納められることがあるので、盗掘を避けるためでもある。加えて、③断崖が近くにないところでは小さな祠を作って遺体を納めるパタネとよばれるものもある。いずれにせよ、納められた遺体は自然にミイラ化していく。葬法としては風葬である。

竹竿のはしごをかけて遺体を壁龕墓に納める（1977年）

上：パタネ。キリスト教徒のものなのか十字架が見え、墓の前には遺体運搬に用いられた伝統家屋の形をした運搬台が置かれている（2009年）
左：マネネの際に開けられた壁龕墓。なかに布で巻いた遺体が見える。墓の前には供え物が捧げられている（1977年）

崖葬墓の近辺には、古いタイプの船形木棺（エロン）が見出だされ、葬儀で遺体を運ぶのに使われた伝統家屋の形をした運搬台（サリガン）や副葬用人形（タウタウ）などが置かれ、祖先祭（マネネ）などの際には供え物が捧げられる。キリスト教徒の場合は、土葬やパタネのケースが多いが、崖葬墓が用いられる場合もある。

こうした崖葬墓は、今日、観光の対象にもなっている。そうしたなかで、副葬用人形が盗掘され、ニューヨークやパリの古美術品ショップに並ぶという事態も生じた。

考古学的時間と民族誌的時間

本特集の冒頭で寄稿している考古学者の小野林太郎は、インドネシア、スラウェシ島中部や北マルク諸島で発掘した岩陰・洞窟遺跡で、約二〇〇〇年前まで遡る二次葬の遺跡を発見している。トラジャの自然洞窟を利用した崖葬墓のルーツもそうした古い時間に遡るかもしれない。他方、岩壁に横穴を掘って作られる壁龕墓は、トラジャに鉄器が入ってくる一七世紀初頭に遡り、パタネは一八世紀ごろ始まったらしい。こうした歴史考古学的時間と同時代的な民族誌の時間は必ずしも直接つながるわけではないが、両者が同じ「現代」という時間と空間のなかに併存しているという事実はきわめて興味深い。

ベトナムの甕棺埋葬

鈴木朋美　奈良県立橿原考古学研究所主任研究員

ベトナム中部では約二五〇〇年前から沿岸部で甕棺墓が著しい発展を見せ始め、その発展は紀元後一～二世紀ごろまで続いた。この金属器時代の考古文化は、サーフィン文化と名付けられた。日本ではちょうど、弥生時代の北部九州地方で大型の甕棺埋葬が営まれていたころである。

サーフィン文化の甕棺墓地は海を臨む砂丘や川の岸辺に作られた。甕棺は縦長の甕と帽子形の蓋からなり、地中に縦置きで埋められる。甕の口径は約四〇～六〇センチメートル、高さは約一メートルで、蓋をかぶせれば一二〇センチメートルほどになる。なかから稀に成人の骨が出土する場合もあるが、保存状態は悪いことが多く、一次葬か再葬かは不明である。一次葬の場合を想定して、どのような体勢をとれば人一人がなかに入るか同僚たちと検討したところ、体育座りで足をきつく上体に引き寄せれば、なんとか入れそうだった。この場合は屈葬となる。あるいは、火葬などによって軟組織を完全に除去せずとも、遺体から水分を抜くような処理をすればもっと容易に入るかもしれない。この場合は再葬となるが、サーフィン文化における甕棺葬の実態はまだ不明な点が多い。

ベトナム、クアンナム省、ビンイェン遺跡で出土したサーフィン文化の甕棺
（所蔵：クアンナム省博物館、撮影：山形眞理子、1998年）

供えられた遠遠の地の品々

サーフィン文化の甕棺墓には土器、鉄器や青銅器、石やガラス製のアクセサリーなどが供えられる（三頁参照）。注目すべきは、日本の弥生時代の甕棺墓からも出土する中国、漢の鏡や五銖錢、インドの影響を思わせるカーネリアンやメノウ製ビーズなど、しばしば遠方の品々が納められていることである。また、独特な形が印象的な耳飾りのなかには台湾でとれるネフライト（軟玉）を使ったものがあり、同じ素材で形もそっくりなものが海を隔てたフィリピン西部の甕棺墓遺跡からも見つかることは驚きである。

サーフィン文化と同じころ、ベトナム北部では、ちゃ密な文様で飾られた銅鼓などの美しい青銅器で有名なドンソン文化が栄えており、そこでの弔い方は一次葬の木棺墓や土坑墓が主流であった。一方、ベトナム南部ではサーフィン文化に比べて、じつに多様な甕棺墓が営まれた。南部に近い中部南端のホアジェム遺跡の多様性は特筆に値する。甕棺の形は一様ではなく、また、方法も一次葬以外に成人と小児、あるいは成人同士を一緒に納めた再葬がおこなわれた。さらに、中国やインドに由来する品々が供えられているのに加え、フィリピン中部のカラナイ洞穴で出土したものにそっくりな土器も副葬されており、南シナ海をまたいだ人びとの往来を鮮明にイメージできる。

上：ベトナム、ホアジェム遺跡の発掘風景。人骨の出土状況の図面作成をおこなっている（所蔵：カインホア省博物館、2010年）
下：整理作業ののち接合されたホアジェム遺跡のさまざまな甕棺たち（所蔵：カインホア省博物館、2011年）

変化する世界と甕棺墓

ベトナム中部と南部ではなぜ甕棺埋葬がおこなわれたのか。甕棺墓の遺跡が海や川の近くに作られていることからも、彼らにとって海上・水上交通が重要であったことは想像に難くない。この交通路は一方で社会にも大きな動きをもたらしたであろう。広大な海上ネットワークに組み込まれ、変化を目の当たりにした人びとは、自分たちのアイデンティティを守り繋げるために独特な形をもつ甕棺墓を作ったのではないだろうか。ベトナムと日本の甕棺埋葬のあいだに直接的な繋がりはないが、未知の世界に向き合ったときに、守られ安らげる「自分が還るところ」を求めた気持ちは、場所は異なれど、同じだったのかもしれない。

右：フィリピン、マスバテ島カラナイ洞穴から出土した浅鉢形土器
（所蔵：フィリピン国立博物館、撮影：山形眞理子、2008年）
左：ホアジェム遺跡に副葬された土器のひとつ。カラナイ洞穴のもの（右）と形態や文様がそっくり
（所蔵：カインホア省博物館、撮影：山形眞理子、2011年）

ベトナム、クアンガイ省、サーフィン遺跡から南シナ海を臨む。20世紀初頭の調査では数百個の甕棺が出土した（2009年）

○○してみました世界のフィールド

居庸関碑文を現地に訪ねる

韓 敏（ハン ミン）
民博 超域フィールド科学研究部

展示資料のふるさとを訪ねてみました

みんぱくの言語展示場壁面にある居庸関碑文の複製と筆者（H0009539、2021 年）

みんぱくの言語展示場に居庸関碑文の複製が展示されている。14 世紀、旅行者の安全を祈願する仏塔が万里の長城の関所、居庸関に建てられた。その内壁には、中国中原地域を行き交った人びとの交流と交渉の証ともいえる 6 種類の文字が刻まれている。

二〇一二年八月、中国社会科学院民族学・人類学研究所および故宮博物院との学術協定の締結手続きのため、みんぱくの須藤健一館長（当時）と北京へ向かって出発した。多忙なスケジュールだったが、合間を縫って、居庸関を訪ねた。みんぱくには、居庸関内壁の碑文の複製が展示されている。現地に足をはこび、七〇〇年も前に刻まれた碑文を自分の目で確認することができた。

碑文に刻まれた六種類の文字

居庸関は北京中心部から北西に六〇キロメートルほど離れた場所にあり、車なら一時間あまりで着く。華北平野とモンゴル高原をつなぐ場所に位置し、万里の長城の関所のひとつである。春秋戦国時代（前七七〇～前二二一年）、燕の国によって居庸塞という要塞が建てられ、南北朝時代（四三九～五八九年）に長城に組み込まれた。以降、歴代王朝が北の遊牧民族の侵攻を防ぐための長城線上の重要な関所として軍隊が駐留していた。

元（一二七一～一三六八年）の時代になると、モンゴル人が中原（黄河中下流域）に入り、北京を都としたため、居庸関は、モンゴル人が故郷と行き来する際の交通の要所となり、皇帝も夏はドロン・ノール（現在の内モンゴル自治区シリンゴル盟ドロン・ノール県）で過ごすため、毎年ここを通って往復していた。元の最後の皇帝、順帝が往来する旅人の安全を祈願して、一三四二年から一三四五年にかけて、居庸関に過街塔とよばれる仏塔を建てた。当初、居庸関には三基の仏塔があったが、のちに破壊され、現在は「雲台」とよばれる台座だけが残っている。みんぱくの初代館長、梅棹忠夫が一九四四年、蒙古善隣協会西北研究所へ赴任するため、北京から張家口に向かった際に、列車から居庸関の過街塔が見えたと『世界を集める――研究者の選んだみんぱくコレクション』（国立民族学博物館、二〇〇七年）のなかで回顧している。

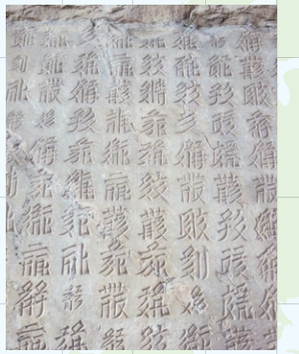
八達嶺長城（万里の長城）。居庸関は長城の南東部に位置する（2012 年）

★ 中国、北京

みんぱくで展示されているのは、この大理石の雲台に刻まれている碑文の複製であるが、現地で見るとより迫力があり深く感銘を受けた。雲台の通路の内壁には、諸仏の姿、ダラニ経文と造塔功徳記がぎっしりと刻まれている。言語学者の長野泰彦によると、ダラニ経文には、サンスクリット語のダラニ（仏教の呪文）が、ランツァ文字、チベット文字、パクパ文字、ウイグル文字、西夏文字、漢字で音写されている。六種類の文字はどれも力強く、深く刻まれている。特に、タングート人がつくった西夏文字を目にしたとき、心が打たれた。西夏文字は六種類のうち唯一、漢字の字形を模倣して生み出された文字だ。西夏王朝（一〇三八～一二二七年）が存在したことを実感するとともに、わたし自身が漢字文化圏の出身であることもあり、彼らのもつ文化的な創造力に圧倒されたのだ。

訪れてこそ気づくこと

現地を訪れることで気づかされたことは多かった。まず、文字のもつ伝達力を改めて認識させられた。六種類の文字は東アジア、南アジア、中央アジアのもので、異なる時期に歴史上に登場したが、同じ大理石に、同様の大きさで文字が刻まれたことは、ユーラシアで育まれた文明の豊かさを伝えると同時に、寛大で多様性を認める開かれた元王朝のありかたを証明しているようにも思える。



雲台の内壁に刻まれている西夏文字（2012 年）

ふたつめは、過街塔の建築様式に見える遊牧民族の知恵である。仏教にとって、仏塔は仏そのものである。過街塔は、雲台がトンネルのようになっており、仏塔の下を人や馬が通過できるようになっている。通るだけで、仏に礼拝することになるので、交通の要所に建てられることが多かった。元は中国を統一したあと、過街塔を中原一帯に広めた。その後、道路建設のため、ほぼ撤去されたが、江蘇省鎮江市に一三一一年に建てられた過街塔が今も残っている。

みっつめは、長城の関所の機能についての再発見である。騎馬民族が中原に入ることにより、この関所は、防衛だけではなく、諸民族が行き来する際の要所ともなった。そういう意味では、過街塔はむしろ、往来を円滑にするために築かれたともいえる。

最後は、安全・平和への願いとその普遍性である。過街塔が建設された元の末期は権力闘争、ゴビ砂漠周辺でのペストの発生、黄河大氾濫が続いた。元王朝にとって過街塔は、防衛のための危機管理の機能とともに、自然災害や疫病から人びとを守るという役割も期待されていたかもしれない。

コロナ禍の現在、居庸関の内壁に刻まれた六種類の文字と仏の姿を思い出すと、癒され、勇気づけられるような気がする。

フィールドに身を置き、自分の目で観察し、自分の頭で考える現場力をいつまでも大切にもち続けたいと思う。

居庸関の雲台（2012 年）

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

特別展
「復興を支える地域の文化 ――3・11から10年」

東日本大震災から10年が経つ今、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動について、あらためて振り返ります。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考えます。

会期　5月18日(火)まで
会場　特別展示館

音楽の祭日2021 in みんぱく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんぱくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。
※「音楽の祭日2021 inみんぱく特設サイト」にて、オンラインで開催します(事前申込不要)

日時　6月6日(日)～6月27日(日)
（6月13日(日)はライブ配信を予定）
特設サイト
https://ongaku.s-minpaku.com/

お問い合わせ先
企画課「音楽の祭日」担当
電話06-6878-8210
（9時～16時、土日祝を除く）

研究公演
「伝承する人びと ――北インド古典音楽の世界」

北インド古典音楽は、即興的な要素をもちながらも、旋法やリズムの法則に基づき、師匠から継承した技法やその表現が大変重要と考えられています。本公演では4名の器楽演奏と語りを通して、現代の北インド古典音楽の伝承や師弟制度について紹介します。

日時　6月26日(土)13時30分～15時50分
（13時開場）
会場　本館講堂
解説　岡田恵美(本館 准教授)

研究公演の参加方法
①会場での参加(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員300名)
※要事前申込、先着順、参加無料(会場参加の方は要展示観覧券)
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】
■友の会(維持会員・正会員)電話先行予約(定員30名)
申込期間　5月10日(月)～5月14日(金)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）
※先行予約は会場でのご参加が対象です。
■一般受付
申込期間　5月17日(月)～6月18日(金)
・オンライン予約
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・メール・電話予約(会場参加のみ)
【申込先】
千里文化財団イベント予約受付
メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp
電話06-6877-8894
（9時～16時、土日祝を除く）

音楽展示、言語展示がリニューアル

本館展示(音楽展示、言語展示)が、3月25日(木)にリニューアルオープンしました。音楽展示では、中央部分にさまざまな音のイメージにあわせたプロジェクションマッピングを導入、臨場感あふれる河内音頭の360度映像コーナーも新設しました。言語展示では、従来の体験型コンテンツをアップデートしました。さらに、新設の「世界の言語カード」を使って世界の言語を調べることができるようになりました。

研究部新メンバー

中川 理(なかがわおさむ) 准教授(グローバル現象研究部)
大阪大学大学院で博士号を取得。大阪大学、立教大学を経て現職。専門は文化人類学。主要な研究領域は経済、政治、グローバリゼーション、人類学理論。フランスを調査地域とし、南フランスの農民やラオス出身のモン難民などの研究をおこなっている。

平野 智佳子(ひらの ちかこ) 助教(人類基礎理論研究部)
神戸大学大学院国際文化学研究科で博士号を取得後、神戸大学大学院保健学研究科の助教を経て現職。専門は文化人類学。オーストラリア先住民アボリジニの飲酒実践、アート制作・販売などについて研究している。

刊行物紹介

■日高 真吾 編著
『継承される地域文化 ――災害復興から社会創発へ』
臨川書店　4,730円(税込)
多発する大規模災害により再編を余儀なくされる地域社会において、地域文化はどのような役割を果たすのか。地域住民とともに地域文化を再発見し、保存し、活用するという実践研究から明らかにする。

■野林 厚志 編著
『世界の食文化百科事典』
丸善出版　22,000円(税込)
食文化の体系を理解するための基礎的、学際的な知識を提供する事典。「理論・概念」「食べ物・飲み物」「健康・科学」「地域の料理と食文化」など12章で構成する。

みんぱくゼミナール

会場　本館講堂

第509回　5月15日(土)
13時30分～15時(13時開場)
【特別展「復興を支える地域の文化――3・11から10年」関連】
郷土芸能の持つ力
講師　小谷竜介(国立文化財機構文化財防災センター文化財防災総括リーダー)
日髙真吾(本館 教授)
祭りや行事において演じられる郷土芸能は、地域の人たちを結びつける力も持っています。それは東日本大震災のような大きな災害時に力を発揮します。郷土芸能の持つ力について事例をとおして紹介します。
【申込期間】
■一般受付　5月12日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第510回　6月19日(土)
13時30分～15時(13時開場)
ヒップホップ・モンゴリア ――韻がつむぎだす現代モンゴル社会
講師　島村一平(本館 准教授)
現在、モンゴルではヒップホップが大人気です。ラッパーたちは、貧富の格差や政治の腐敗の現実を韻を踏みながら鋭くえぐり出します。本ゼミナールでは実際に音楽を聴きながらその文化社会的背景を考察します。
【申込期間】
■友の会(維持会員・正会員)電話先行受付
5月10日(月)～5月14日(金)
■一般受付
5月17日(月)～6月16日(水)

ゼミナールの参加方法
①会場でのご参加(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員300名)
※要事前申込、先着順、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
※本人を含む2名まで(会場参加のみ)
※会場参加の方には入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。
【申込方法】
■友の会(維持会員・正会員)電話先行予約(定員30名)
【申込先】
千里文化財団友の会事務局
電話06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）
※先行予約は会場でのご参加が対象です。
■一般受付
・オンライン予約
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(会場参加のみ、定員30名)
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
※申込不要（当日先着順、定員各日42名）、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

5月23日(日)14時30分～15時30分(14時開場)
モンゴル・ヒップホップの世界
話者　島村一平(本館 准教授)
会場　第4セミナー室他

5月30日(日)14時30分～15時15分(14時開場)
都市の清掃制度について ――ベルリンを中心に
話者　森明子(本館 教授)
会場　第5セミナー室

みんぱく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展「復興を支える地域の文化」の会期中の5月15日(土)、16日(日)に運行します(急遽予定を変更する場合がございます)。
※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会
友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。受付フォームは友の会ホームページ内にあります。
友の会講演会の参加方法
①本館第5セミナー室での参加(定員40名)
②オンライン(ライブ配信)での参加(定員100名)

第512回　5月1日(土)13時30分～14時40分
アジア鍵盤楽器考
講師　岡田恵美(本館 准教授)
1842年にフランスで発明された鍵盤楽器ハルモニウム。その後、西欧では圧縮型鞴(ふいご)のハルモニウム産業が、米国やアジアでは吸入型鞴のリードオルガン産業が興隆しました。本講演では、19世紀後半以降の日本のリードオルガン産業とインドのハルモニウム産業に着目し、楽器改良や楽器の受容に伴う音楽文化の再編について考察します。
※受付フォーム　https://www.senri-f.or.jp/512tomo/

第513回　6月5日(土)13時30分～14時40分
女神となった疫病 ――インドの天然痘女神信仰
講師　三尾稔(本館 教授)
罹患率も致死率も高い疫病として1970年代まで猛威をふるった天然痘。年輩の方は予防のため種痘を受けた経験があるはずです。インドではこの病そのものを女神として信仰してきました。天然痘が絶滅した後もさまざまな病の神として広く信仰を集めています。今回の講演会ではこの病の歴史や北部インドの天然痘女神信仰の事例に基づき、伝染病に対応し、災いを乗り越えようとするインドの人びとの知恵や想像力の特徴を考えます。
※受付フォーム　https://www.senri-f.or.jp/513tomo/

みんぱく友の会オンラインレクチャー
友の会ホームページでミニレクチャー動画を公開中です。
なぜ古代文明の建物は大きいのか ――南米アンデス文明からの視点
講師　関雄二(本館 副館長)
世界の古代文明に共通するのは、巨大な建物、いわゆるモニュメントを築いたことです。その理由、そして大きくなったことにより、社会がどのように変貌したかについて、南米アンデス文明を例に解説したいと思います。
※公開ページ　https://www.senri-f.or.jp/tomomovie004/

世界の
バスケタリー
×
バスケタリーの
世界

ガーナの輸出向け籠づくり

色鮮やかなアフリカの籠「ボルガバスケット」をご存知だろうか。民族工芸品やフェアトレード商品として、日本でも広く流通しているこの籠の歴史は、じつはそう古くはない。地域経済を支える輸出商品にまで成長したボルガバスケットと、つくり手はどのように向き合ってきたのだろうか。

牛久晴香（うしく はるか）　北海学園大学 講師

ガーナ北東部の特産品、ボルガバスケット

ガーナ北東部のボルガタンガ地方は、アフリカを代表する籠のひとつである「ボルガバスケット」の大産地だ。イネ科のギネアキビ（*Panicum maximum*）の稈（かん）をもじり編みにしたこの籠は、インテリア用品やかごバッグ、民族工芸品やフェアトレード商品として、欧米諸国や日本で広く販売されている。輸出個数は毎年一〇〇万個以上にのぼる。

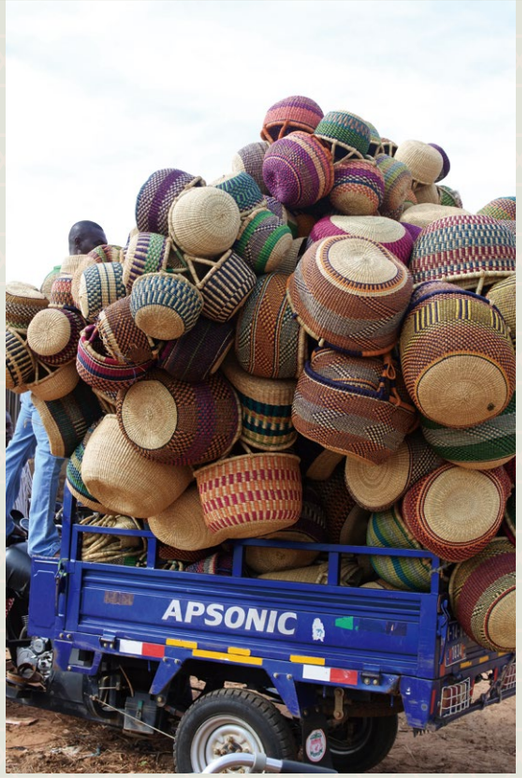
西アフリカの内陸サバンナ帯に位置するボルガタンガ地方では、イネ科草本を編んで多様な道具がつくられてきた。ボルガバスケットの直接の「祖先」は酒の濾し器（こし）である。これは地元に生育するベチバーグラス（*Vetiveria nigritana*）をもじり編みにした籠だったが、酒造りの主体が家庭から造り酒屋へと移るにつれて、より効率よく酒を濾すことができる別地域の籠に置き換えられていった。

役目を終えようとしていた一九五〇年代初頭、濾し器に輸出商品としての可能性が見いだされた。現在のブルキナファソから来た商人らが、稈を染めたり持ち手をつけたりして、濾し器を欧州で売れそうな形に変えていったのだ。ボルガバスケットの誕生である。その後は地域内外のさまざまな主体が欧米や日本の需要に合うようなデザインを考案し、多様なバリエーションが生まれた。外来の成形技術もとりこまれた。一九八〇年代には素材も変わり、ガーナ南部からギネアキビをとり寄せるようにもなった。めまぐるしい変化を遂げながら、ボルガバスケットは世界に広く流通していったのである。

経済活動としてのボルガバスケットづくり

ボルガバスケットが国際的に人気を博したことで、濾し器の時代とは比にならないほど多くの人が籠編みの技術を身につけていった。現在は約五〇の村の老若男女がこの籠を編んでいて、例えばわたしの調査村では三人に一人は編み手である。

昼下がり、庭先でおしゃべりを楽しみながらバスケットを編む（ボルガタンガ地方、2012年）



商人は3日に一度、市の日に合わせて各村でバスケットを買い付ける（ボルガタンガ地方、2016年）

ボルガタンガの人びとにとって、ボルガバスケットは貴重な現金収入源であり、地域経済を支える重要な輸出品である。ただし、バスケットづくりを専業にする人はおらず、あくまでもさまざまな収入源のひとつとして生活に組みこんでいる。

ボルガバスケットづくりは一にも二にも経済活動だ。彼ら自身はバスケットを使わないので当然とも言えるが、人びとがこの籠を「伝統」や「文化」と結びつけて語ることはまずない。編み手は存外あっさりした態度でボルガバスケットと向き合っている。

バスケットづくりを盛り上げる「自分たちの編み方」

しかし、ボルガバスケットづくりを動かしてきたのは経済だけではない。例えば、産地南部の村々は昔からあるデザインを精巧に編むことを得意とする一方で、北部の村々は多様なデザインを編むことに長（た）けている。これには、両地の編み方の微細な違いとその変遷が関係している。

ボルガバスケットの発祥地は南部である。北部は南部からバスケットづくりを学んだが、経（た）材の素材と本数を自己流に修正した。南部ではベチバーグラスの稈二本を使うところ、北部は太いモロコシ（*Sorghum bicolor*）の稈一本に変えたのだ。もじり編みは、反発力のある経材と柔軟性のある緯（よこ）材のバランスをとることに技術的な特徴がある。経材の反発力に比例して、緯材も南部では細く、北部では太くなる。おのずと、編み目の密度は南部が密に、北部が粗になる。

ギネアキビの稈を割いてよったものをひと目ずつ、緻密に編んでいく（ボルガタンガ地方、2012年）

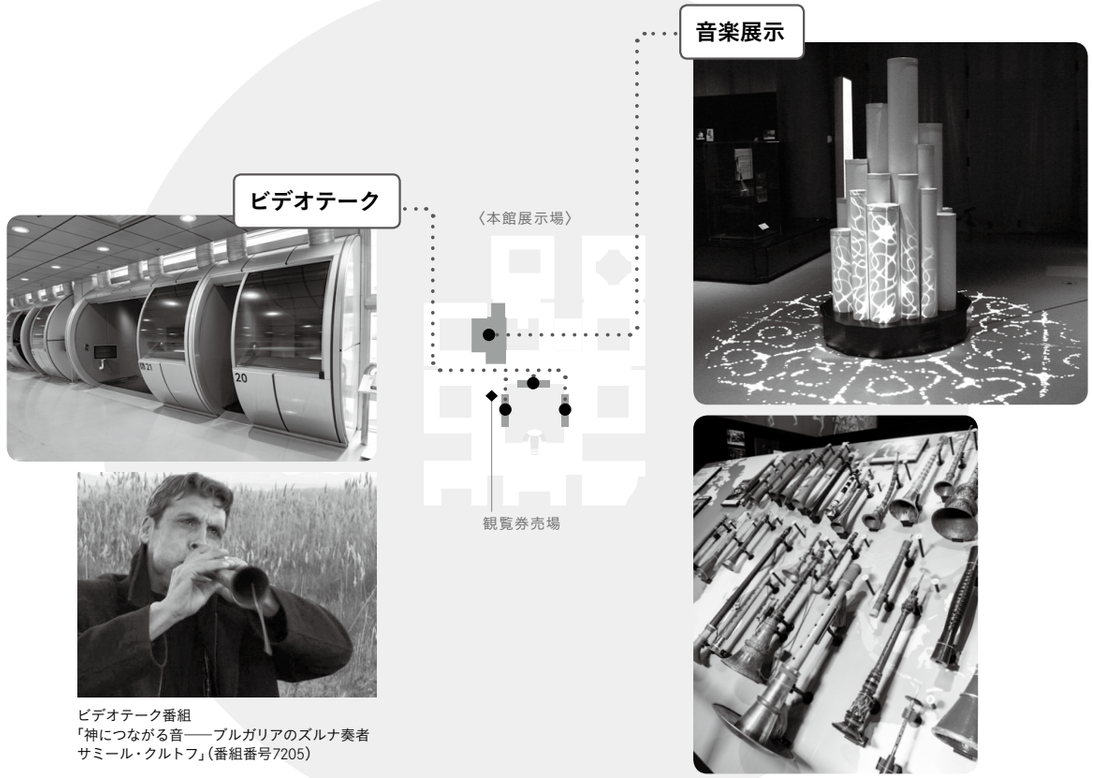
同じように見えるもじり編みの籠でも、素材の太さと反発力の違いは、異なる技術を習得するほどの違いを編み手に感じさせる。そのためすべての材がギネアキビに変わった後も、南部は細い稈を、北部は太い稈を選んで使っていた。しかし、のちに編み目の粗いバスケットが市場で評価されなくなってしまい、北部は細い稈をもちいる南部の編み方を努めて学んだ。その後、今度は北部の太い稈をもちいる編み方が外来のデザインと組み合わされて人気を博した。以降、北部は太い稈と細い稈を使いわけ、外来技術もとりこみながら多様なデザインを編むようになる。

そのため、北部の編み手は「南部は古い編み方に固執している」と語り、市場の変化に柔軟に対応し、多様な技術を習得してきた自分たちの進取の気性を誇る。他方で、南部の編み手は「（北部とは違って）わたしたちは自分たちの編み方だけで食べていける」と言い、発祥地としての歴史と精巧なバスケットづくりを誇る。

編み手は市場と向き合う過程で「自分たちの編み方」を見いだしていった。それが村のあいだの好敵手（ライバル）意識を喚起して、バスケットづくりを内側から盛り上げているのである。

新・音楽展示の歩き方

民博 人類基礎理論研究部　岡田（おかだ） 恵美（えみ）



ビデオテーク番組
「神につながる音――ブルガリアのズルナ奏者サミール・クルトフ」（番組番号7205）

上：プロジェクション・マッピング
下：チャルメラの世界的な伝播・分布
（「チャルメラ――演じる音」セクション、H0144575ほか）

みんぱくの展示エリアは、オセアニアから始まって、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカと続き、まるで世界一周するかのような地域別の展示が魅力のひとつである。一方で、通文化展示として、「言語」と「音楽」のエリアも中央部分に配置されている。人類の営みに欠かせない「ことば」と並んで、世界の多様な楽器や音楽文化に着目したエリアが特設されていることは、わたしのような音楽文化を研究する者にとっては誇らしいことであり、これまで音楽展示に尽力された方々に深い感謝の念を抱かずにはいられない。その音楽展示エリアの一部が、今年の三月下旬にリニューアルされた。

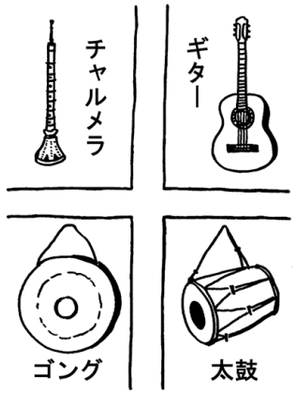
音を感じる

今回、音楽展示場の中央スペースに、音・映像・観覧者の動きを相互に連動させるプロジェクション・マッピング（コンピュータグラフィックスを立体物に投影する技術）が導入されている。近年は、動画配信サイトを通して、生活音そのものを傾聴して楽しむ文化が世界的に浸透してきている。このスペースでは、音高（周波数）・強弱・長さ・音質といった音の要素や、フレーズ、音の重なりを聴覚でとらえるとともに、それを形・色・動きに置き換え可視化した映像も楽しめるようになっている。そこで耳にする生活音や環境音、人びとの声が、どのような空間や場面で、どのような人たちによって紡ぎ出されているのか、それぞれにイメージを膨らませていただければ幸いである。

楽器をどのように分類するか？

音楽展示は、中央から放射状に「ゴング」「太鼓」「ギター」「チャルメラ」の四セクションにわかれている。じつはこのわけ方には、人類の知恵の歴史が潜んでいるのである。読者の皆さまも、多種多様な世界の楽器を一体どのように分類できるか、少し考えてみてほしい。

例えば、西洋音楽の世界では、「管弦打」という分類法が主流である。だが、「管」は形状、「弦」は発音体、「打」は奏法であり、そもそも分類する基準が「ちぐはぐ」ではないかと異論を唱えた人物が、クルト・ザックスというドイツ出身の音楽学者である。理路整然とした楽器分類法の模索に西欧の音楽学者たちが躍起になるなか、脚光を浴びたのが、古代インドの演劇理論書で論じられた四綱楽器分類法であり、「発音体（振動して音源となるもの）」を基準にしたものである。これを援用・発展させたのが、前述のザックスらによる楽器分類法であり、①ゴングのように楽器自体が振動して発音する「体鳴（たいめい）楽器」、②太鼓のように膜の振動で発音する「膜鳴（まくめい）楽器」、③ギターのように張られた弦の振動で発音する「弦鳴（げんめい）楽器」、④チャルメラのように空気の振動で発音する「気鳴（きめい）楽器」にわけられている。この分類法は今日、世界中の楽器博物館で広く採用されている。



音楽展示のセクションもザックスの楽器分類法に沿った配置になっている（筆者イラスト）

チャルメラ世界地図とビデオテーク

ラーメン屋台の合図でもお馴染（なじ）み、チャルメラの展示も一部リニューアルされた。チャルメラは、管本体の上部に付けた、おもに二枚のリードのあいだに息を吹き込んで奏でる気鳴楽器である。あらたに世界地図に配置された三三種類の各地域のチャルメラから、アジアやヨーロッパを中心にその世界的な分布を巨視的に感じ取ることができる。また同時に、形状・素材・装飾の違いをじっくりと比較・観察することも可能である。構造的には類似した楽器であっても、演奏される場やその土地の音楽様式に合うように改良され、それぞれの地域に息づいている。人びとが知恵を絞ってきたことを、このチャルメラ世界地図が物語ってくれる。

また楽器という「モノ」だけではわかりえないのが、音楽である。音楽は時間とともに流れてゆく、人びとが営む「行為」である。社会や個人にとって、それぞれの音楽はどのような意味と役割をもっているのか、楽器製作者はどの部分に誇りを抱いているのか、演奏者は何を感じ、何を伝えようとしているのか。こうした疑問が湧いてきたときは、音楽展示と連動したビデオテーク番組を視聴してみてはいかがだろうか。文化における音楽という行為の意味、楽器製作者や演奏家の語り、そこには宝物がたくさん詰まっている。

右：1キログラム近い大型のチャルメラ「ネー」（ミャンマー、H0144575）
左：イベリア半島からアメリカ大陸に伝わったチリミア（グアテマラ、H0004543）

シネ倶楽部

感覚に訴える映画「戦ふ兵隊」の方法

北村皆雄
日本映像民俗学の会代表

「戦ふ兵隊」

1939年／日本／日本語／66分／DVDあり
監督：亀井文夫
撮影：三木茂

戦前、日本で数多くの戦争映画が作られたが、反戦映画、厭戦映画を作ったのは亀井文夫一人であろう。彼は日中戦争を題材に「上海」（一九三八年）を、その後「戦ふ兵隊」（一九三九年）を作った。「上海」は劇場で公開されたが、「戦ふ兵隊」は内務省による検閲すら拒否され上映禁止になった。それどころか二年後、亀井は治安維持法違反容疑で検挙、一年間投獄され、演出家資格を抹消された。取り調べをおこなった特別高等警察の主任は、「戦ふ兵隊」のような映画を作ったということは、「まさに国賊であり、陛下に対しては罪万死に値いする」と言ったという（亀井文夫『たたかう映画』岩波書店、一九八九年）。

ふたつの映画

「戦ふ兵隊」の冒頭のシーンは、中国の小さな村落の祠にうずくまって祈りを捧げる農夫の姿ではじまる。日本兵に放火された家、こちらを向く悲しげな老人のクローズアップ、さらに燃える家の前に乳飲み子を抱える子どもら数人が映し出されていく。その後、家を失い流民化した中国人たちの移動が延々と続く。と、次のカットで、日章旗を掲げた戦車が轟音を上げて画面一杯に通過する。中国と日本の関係が鋭く炙り出される編集だ。戦意高揚が求められた当時の映画に、このようなシーンを意図的に入れる映画がほかにあっただろうか。

このころの戦争ニュース映画（時事問題などの情報の伝達および解説を内容とする記録映画の一種。戦時中は、国策宣伝のために用いられた）を見ると、日本兵の激しい攻撃、砲弾による破壊、勝利の日の丸を掲げて万歳と叫ぶといった戦意高揚シーンがほとんどであった。それに対してこの映画は、戦う兵隊は出てこない。出てくるのは、あの広大な中国大陸の大地に疲れ切って飲み込まれていく戦わない兵隊たちの姿である。日本軍が前進していった後、遠くに伸びる一本の道に、捨て置かれた病馬がロングショットで写される。カメラをアップにしない。道と馬を、引いた画面でじっと見据えていると、馬は崩れ落ちて命を終える。馬も兵士も命は同じだと描いているようだ。「上海」でも、戦闘シーンはない。激戦地跡の日本兵の墓、卒塔婆、撃ち抜かれたヘルメットなどを長い移動ショットでひたすら追っている。

捨てられた病馬（提供：日本ドキュメントフィルム）

中国大陸に飲み込まれていくような日本軍の行進
（提供：日本ドキュメントフィルム）

映像とナレーション・音楽の対立

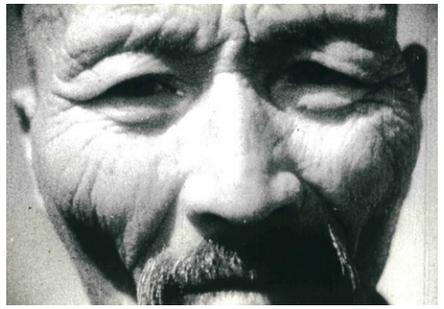
「上海」の手法はこうだ。街に入城する日本軍の勇壮な行進がある。それに「この行進こそは、あらゆる意味において、上海の黎明を意味する画期的なものである」といったナレーションが被さる。画面にはそのことばを裏切るかのように、無表情な、ときには鋭く凝視する中国人民衆の表情を差し込んでいる。

亀井は、音（現実音、ナレーション、音楽）と映像を意識的に切り離し、ときにはちぐはぐにして対立させているのだ。検閲をとおすために入れたナレーションと勇ましいマーチに、相反する画面をぶつけ、そこから浮かびあがる想念を、観客の感覚に投げかけるのである。

「戦ふ兵隊」では、ナレーションの代わりに字幕を入れている。映像の補助的な説明でなく、字幕と映像の微妙なずれから出てくるものを効果的に狙っている。昨年のNHKの朝ドラ「エール」のモデルになった古関裕而が音楽を担当しているが、映像があらわす内容に音楽を同調させ過ぎていると、亀井は少し批判的だったようだ。音楽も映像との対立を狙っていたのである。

亀井をとおして考える

わたしが亀井文夫の映画について考えたいと思ったのは、最近の映画やテレビ番組で、音、特にナレーションと音楽が、画面の補足になり過ぎているのではないかと思っているからだ。テレビのドキュメンタリー番組では、ひとつひとつの画面に必ず説明的なナレーションが付くのが常態化している。もっと映像と音の重層的な組み合わせが考えられないだろうか。


家を焼かれた中国農民の表情（提供：日本ドキュメントフィルム）

「戦ふ兵隊」では、馬に蹄鉄を打ち付ける音と磨くヤスリの音を強調して、その後に展開する馬の悲劇をいっそう際立たせていた。

最近東京ドキュメンタリー映画祭で、若手の人類学者太田光海の映画「カナルター――螺旋状の夢」を観た。アマゾンの熱帯雨林に暮らす民の薬草や夢によって自分や家族、世界を理解しようとする原初的な感覚が、映像と現実音によってうまく表現されていた。音楽を使わず音に工夫があった。

晩年の亀井文夫は、自然、環境、生き物と民俗世界に近づいていったが、遺作「生物みなトモダチ」シリーズの「トリ・ムシ・サカナの子守歌」（一九八七年）では、音、特に音楽とナレーションをストレートに映像につけていた。一種、観念の叫びにも似たこの映画に、あの「上海」と「戦ふ兵隊」の亀井文夫はどこにいったか、いささか考えさせられたのであった。

ことばの迷い道

教団の名は誰のもの?

石原 和（いしはら やまと）
立命館大学 授業担当講師

昨年、江戸時代後期に登場した如来教（にょらいきょう）という教団の歴史的意義について、それがおこり広がった地域である名古屋の新聞で論じる機会を得た。その内容について、信仰の当事者がどのような感想を抱いたのか興味をもったので、交流のある信者さんに反応を聞いてみた。すると、信者のあいだでは特に感想は出なかったという。驚いたことにその理由は、記事の内容とは関係なく、「自分たちの信仰のことを『如来教』と認識していないので、新聞記事に『如来教』と出ていても気にとまらなかった」ということだった。「如来教」という名称は公的に登録されているにもかかわらず、である。

ところで、この「如来教」という名は、江戸時代の開教当初からあったものではない。当時は決まった名をもたず、信者は「このたび」「このたびの利益」と自称していた。明治維新後は、曹洞宗（そうとうしゅう）の傘下で活動していたが、一九二〇年代に一部の信者から独立教団化運動が起こった。このころは宗教法制度が変わっていくまっただなかにあり、独立のためには自らの信仰集団を公に定められた宗教団体のひな型に合わせて変えていく必要があった。そこで、宗教学者の石橋智信（いしばしともの ぶ）をブレーンに迎え、改革が進められた。書類に記載する必要性から、それまで無名であったこの集団ははじめて「如来教」という名をもった。また石橋の研究を通じて、この当時の教祖信仰、個人修養的なあり方ではなく、近代宗教のあるべき姿とみなされていた集団的教義信仰であることがあらたに強調され、仏教や神道からの独立性が主張された。この「如来教」像は信者にも共有され、彼らは自らの信仰を自覚していった、といわれている。

こうした歴史的経緯は認識していたが、今回「如来教」ということばの自覚という問題をめぐって、教団名のような制度の次元と実際の信仰の次元との溝が、現代に至るまで引き継がれているということに改めて気づかされた。「如来教」ということばは、独立を目指した人びと、宗教制度にかかわる人びと、学問にかかわる人びとによって、この集団を指す道具としてつくられ、用いられた。さらにその名称は集団の性質にかかわるイメージをも含むものとなっている。こうした名前やイメージは、信仰の当事者には必ずしも共有されていない。彼らのもとにあるのは、外的に形成された「如来教」の信仰ではなく、神や教祖にすがって生きる日常だけであろう。「如来教」ということばは、あくまでも教団の指導者、役所、学者のものであって、信仰者のものではないのかもしれない。にもかかわらず、その当事者が何者であるかを規定するものとなってしまう。今回は問題にはならなかったが、外部からの視線に当事者が抵抗感を示す事例も少なくない。

宗教にかぎらず、わたしたちの日常のなかでは道具としてのことばを用いて、集団の名をよぶ場面は少なくない。その集団をことばによって切り取り、理解することが、当事者にとってどのような意味をもつことになるのか。わたしたちは想像をたくましくする必要があるだろう。

月刊みんぱく 2021 5月号

編集後記

先日、岡山県某市の商店街で巻き寿司店のケースを覗(のぞ)いていると、前にいた初老の女性に「ここの美味しいよ」と言われたのも束の間、「あまりそばに来んどいて」と言われ凍りついた。旅行者然(ぜん)としていたので仕方がないが、心が空っぽになった気がした。新型コロナに起因する虚無感。それは感染して亡くなった人との接触が、家族でもかなわないという不条理な状況においても感じるものだろう。

本号の特集「島世界の弔い」では、沖縄やインドネシアのトラジャの複葬（崖葬墓）やベトナムの甕棺埋葬のあり方が、先史時代から現在までを射程に紹介される。風葬により時間をかけて白骨化した遺体をさらに別の墓域や骨壺などに納める複葬は、死者との関係を長く保ちたいと願う心性のあらわれではないか。輪廻(りんね)や復活といった大宗教による死生観と葬送法が拡(ひろ)がる以前、人はかけがえのない人から引き裂かれる心身をこうして慰めてきたのだろう。終活や「墓じまい」ということばを聞くようになって久しいが、本特集は死者との向きあい方をあらためて考えさせてくれる。

本号への寄稿を機に、山下晋司さんが弘文堂のウェブサイト・弘文堂スクエアに「トラジャその日その日 1976/78 ――人類学者の調査日記」という連載を始めることになったそうだ。貴重な過去の記録や写真が公開されることを喜びたい。（南真木人）

●表紙　インドネシア、スラウェシ島タナ・トラジャ県レモの壁龕墓（へきがんぼ）。今日、観光の対象にもなっている。1980 年代には副葬用人形が盗まれ、欧米の古美術品ショップに並ぶという事態も生じた
（撮影：山下晋司、1984 年）

次号の予告

特集

「音楽の祭日」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員
『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員
『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

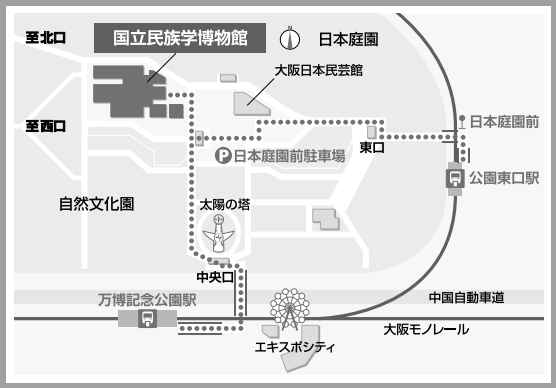
詳細は、公益財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06 − 6877 − 8893 ／平日 9:00 ～ 17:00）

月刊みんぱく 2021 年 5 月号
第 45 巻第 5 号通巻第 524 号　2021 年 5 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

1年間お届けします！

『月刊みんぱく』定期購読のご案内

みんぱくの広報誌『月刊みんぱく』では、催しの情報のほか、世界各地の文化、衣食住の生活用品の展示、最新の民族学、文化人類学の研究について、研究者が親しみやすいエッセイやコラムで、毎月紹介しています。定期購読は年間をとおしていつでも始められます。

定期購読料：**4,400**円（発送手数料込）

展示も楽しみたい方には こちらもオススメ！

『月刊みんぱく』が毎月届くほか、年間何度でも本館展示をお楽しみいただけるミュージアム会員へのご登録もおすすめです。

ミュージアム会員…**5,000**円（年会費）

お問い合わせ

定期購読、友の会のご利用は、国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日 9:00 ～ 17:00）　minpakutomo@senri-f.or.jp